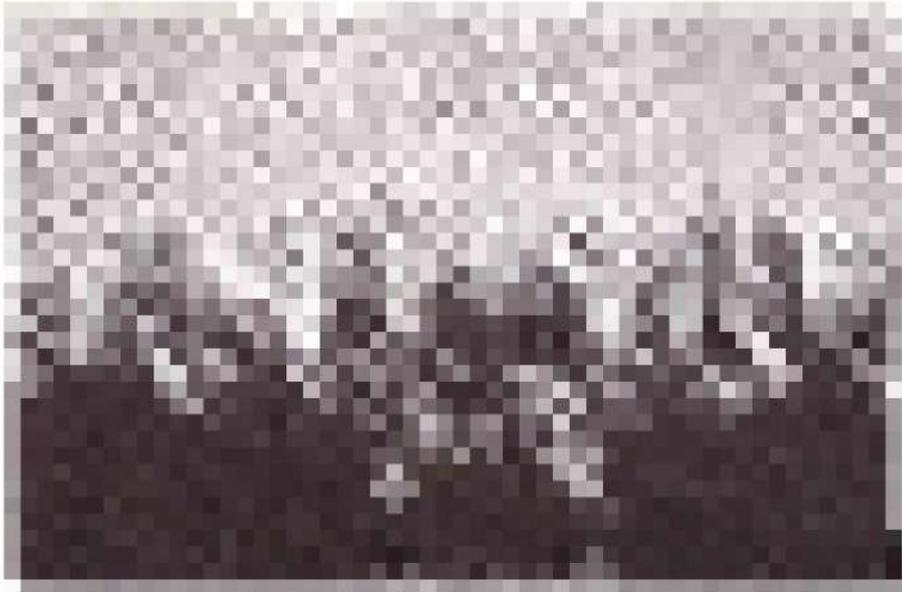


# Scramble Shot



生ビリャソンを確信させてくれたが、今回の《愛の妙薬》でのネモリーノは、完璧だった（12月14日・チューリヒ歌劇場）。

ビリャソンは、舞台に現れた時点で、もう完璧なネモリーノだった。すべての動作が過剰でなく、自然な笑いを呼ぶが、「道化役だから」と簡単に片付けられない緻密さで、心地よく微笑ませしてくれる。だからこそ、アディーナへの深い愛が音楽から迸り出ると、オペラ・セリアのような深刻さをもって、聴衆に心が迫ってくる。そして迎える〈人知れぬ涙〉。声のアタックの部分では毎回緊張させられるが、ビリャソンの豊かな音楽性が、聴衆の琴線を刺激する。鼻声やファルセットに逃げることなく、朗々と喜びと切なさを訴え、素朴な一青年として腰掛けると、大喝采の嵐が起こる。長い拍手の後、アンコールに応え、歌い終わると、劇場は総立ち。2日目の14日など客席のどこから「グラーツィエ（ありがとう）」という声まで飛んで来た。カーテンコールでは、客席からの歓声に応じて、雄叫びをあげたり、緞帳をくぐって登場したり、すべての人たちに愛されたネモリーノだった。

アサガロフの愛らしい演出と、指揮をしながら、レチタティーヴォのピアノも弾くネッロ・サンティの名人技で、この《愛の妙薬》は、チューリヒの聴衆に永年愛され続けてきているが、12月の3回の再演にビリャソンを得て、オペラ史上最高の《愛の妙薬》の1つとして語り継がれていくことであろう。（中 東生）

## Opera チューリヒ歌劇場《愛の妙薬》でビリャソンが名ネモリーノを披露

声帯の故障を乗り越えたビリャソンが、このところずっと気になっていた。震災直後にパリでチャリティ・コンサートに出演していた姿がニュースで流れたり、メトロポリタン歌劇場来日公演をキャンセルしたテノールの代わりに、《ランメルモールのルチア》を1回歌うためだけに来日した。その後7月には、チューリヒ歌劇場の《羊飼いの王様》プレミエで、新

